

カンカンカン。

鐘が鳴った。ラスト一周の合図だろうか。

僕のすぐ前にはチビとひよろいのがいて、更にその二メートル程先にリズミカルにトラックを蹴る坊主頭が見えていた。「よーすけファイター！」黄色い声援が無意識に耳に入ってきてしまつ。羨ましい限りだ。

カーブを抑え気味で走り、直線に入ったところですぐにチビを抜いた。ひよろいやつの不規則な呼吸が聞こえる。ゴール地点では、中村先生がストツプウォッチを握りしめながら何か大声で叫んでいた。相変わらずドイツ代表の黒いウインドブレーカーを着て。カーブに差し掛かるとひよろいのが急にスピードを落とし、そのせいで坊主頭との差が広がってしまったように思われた。後方からはまた、別の足音が迫る。曲線で抜かすのは何だか勿体ないような気がし

たけど、イライラするくらい遅いから一瞬で抜き去ってやった。最後の直線に入ったところで、坊主頭はまだ僕の三メートル前。

百メートル走なら、お前には絶対負けないぜ。突然の追い風にのつて、僕はラスト五十メートルから急激にスピードを上げていった。自分でも驚くくらいどんどん加速していく。芝のフィールドでは、高跳びに失敗した誰かがマットの上で膝を抱えていた。残り二十メートル。差は一メートルまで縮まり、上下に激しく動く坊主頭の肩が目の前にある。残り十メートル、手を伸ばせば届きそう。毛穴から吹き出た大量の汗が風に飛ばれていく。残り五メートルで横に並んだ。坊主頭の右腕が僕の左腕に少しだけ触れた。残り二メートル、坊主頭が視界から消えた。僕はもう、自分が息をしているのかどうかも分からなかった。最後の一步を大きく踏み出

した僕は、坊主頭の呼吸を完全に背中に受けた。チビが三位で四位はサラサラヘアーの女みたいなやつ。ひよろいのは結局五位だった。両膝に手を置き、前屈みになってそこで見届けた僕はよろよろと鮮やかな緑色に歩み寄っていた。小さなレールのようなものに躓いて芝に倒れ込み、その拍子に打った右肩を痛くもないのにさすりながら、僕は目を閉じて仰向けになつた。乱れた呼吸を整え、両手両足を大きくバタンと下ろすのと同時に太陽を見た。眩しすぎる日差しに目を細め、太陽の光に手をかざしてみる。恐ろしくなるくらい晴天だった。雲一つない真つ青な大空が僕を包んでいた。膝を曲げて両手を頭の後ろで組み、もう一度太陽を見上げた。十五年間で、間違いなく一番の青空だった。

「順平、お疲れ。大丈夫か？」

太陽の代わりにドイツの国旗が頭上に現れた。

「大丈夫ですけどかなり疲れました。」

「だろっ。俺もまさかトップでゴールするとは思ってなかったからな。ほれ、差し入れだ。」

僕はふらふらと立ち上がり、目眩がするのもお構いなしに火傷しそうなくらいキンキンに冷えたボカリスウェットを一気に飲み干した。息が続かなくなつて、ペットボトルを口から離れた後で少しむせた。

その日、中村先生は晩御飯にお寿司をご馳走してくれた。まあ、回ってるやつだったけど。

「あれなあ、東北地区の大会って知ってたか？お前、県大会出てみるか？」

「いや、いいっす」

またあの体育着で走るなんて、本気で勘弁して欲しい。あの中途半端な緑色はどうにかしてくれ。

三週間後、僕は県大会の決勝レースで七人中五位でゴールした。せめてサッカーのゲームシヤツで、と中村先生に頼んでみたけどやっぱり駄目だった。

『県大会での五位』それは中学生の僕にとつては何の価値もなかった。嬉しくもなかったし、悔しくもなかった。それがすごいのか全然すこ

くないのか、どうでもいいほど興味がなかった。

それなのにその半年後の二月、偏差値六十二の高校に奇跡的に面接で受かった僕は、なけなしの一万円でミズノのランニングシューズを買った。朝は五時に起きてまだ暗いうちから身体を温め、夜は倒れそうになるまで何度も同じ景色を眺めながら走った。四月に入ると両手両足に一キロの重りを付けても五キロ走るのに十五分程しかかからなくなっていたけど、それが速いのか遅いのか僕には分からなかったし、その十五分というのも正確に測ったタイムではなかった。ただ、僕は倒れそうになるまで走ることが楽しくて楽しくてたまらなかった。喉の奥が締め付けられ、ふくらはぎが震え、太腿が熱くなり、汗が頬から首を伝って胸や背中をつっとかけおる。身体中の神経が僕に走るよう訴えていた。

そして、僕自身も走らずにはいらなかった。

「五十、五十一、五十二、五十三」

野球部員達の掛け声に負けじとマネージャーが声を張る。入りの三百にしてはいつもよりだいぶ遅い気がした。一昨日の疲れがまだ残っている、と言えはいい訳になったかもしれないけ

ど、それじゃ僕は弱い人間です、って言っているみたいだから。

タイムは昨日より四秒も遅い四分十二秒一。

「次百メートル計ってみるか？」

先輩の言葉を無視し、僕は水道の蛇口を捻ってそこに額を被せた。二日前、僕は高校生になって初めて公式戦でのレースをしたのだ。

ゴールデンウィークの初日から二日間、小田原の競技場で最終的にはインターハイに繋がることになる西地区大会が行われた。一日目、無理矢理エントリーされた百メートルの予選で十秒〇二という大会新記録を樹立してしまった僕は、先輩達の反対を押し切り、周囲の選手から非難の嵐を浴びながらも、準決勝のレースを棄権した。二日目はついでも出た八百が予選で二分三秒六八、本命の千五百は決勝レースで四分八秒二二という好タイムで、何だかよく分からないうちに僕は二種目で県大会出場を決めていた。

その日から、僕は自分のタイムをノートに記録するようになった。川島先生から寄付してもらったストツプウォッチのおかげで朝と夜のランニングのタイムも正確に測ることが出来るようになった。とにかく走った距離とタイムは全て記録し、その日のベストタイムには水色の蛍光

ペンで印を付けた。自己ベストが出ると、僕はそれをピンク色でぬった。毎日持ち歩くせいで表紙の小さな汚れは日に日に増殖し、裏の厚紙はふやけて弱々しくなっていた。

五月の第三週の土日に県大会が行われた。確か川崎の等々力競技場だったと思う。

結果から先に言おう。その日、僕は地区大会と同じようなレース展開で、二位に五秒近い差をつけて優勝した。ちなみにそれは千五百の方の話で、八百はというと、一応関東大会出場枠ギリギリに食い込んだものの、散々なレースだったのでそこは深く突っ込まないで欲しい。本当に。この本を読んでいる人の中に、あのレースを見た人間がいないことを切に願う。本当に。

地区大会から県大会までは本当にあつという間だったけれど、県大会が終わると次の関東大会まで一ヶ月以上調整の期間があった。顧問の先生に休みを貰った僕は少しだけ、そう、ほんの二日間だけ、走るのをやめてみた。その時僕は、煙草を止められない人の気持ちが届いらい分かった気がした。椅子に腰掛けた僕の両足には常に入力が入っていて、膝に手を置いていないと超高速の足踏みをし始めてしまいかねなかった。学校の長い廊下を無意味に何度も往復したり、自宅のリビングのソファとテーブルの

周りを八の字に歩いてみたり、自分で言うのもなんだが頭が壊れた人みたいだった。体力を使っていないから当然のように食欲もなく、深夜の二時を過ぎてても睡眠はやって来ず、暇をもてあますような形になってしまったので、ベッドの小さく軋む音も気にせず最近「ご無沙汰だった彼を元気づけてやった。彼女とは三回戦までしか試したことがなかった僕は、個人戦では四回戦まで勝ち進み、終わってみると思った以上に疲れていた。マスターシヨンの後の脱力感は何かをやり遂げた時の達成感に似ていて、それなのに同時に空虚感にも襲われる。走り終わった後と同じだ、と思った。そして僕は何故か、焦燥の念に駆られていた。

余命一日を宣告された繁殖期の雄鳥みたいに、(腰の代わりに手を動かし続けた。一人で汗をかく運動をした後で僕はもう『明日』になつてることに気付き、三時の涼しく暗い夜に風を殴りに行った。気のせいか空は少しずつ朝を告げ、新聞配達バイクの音が遠くに聞こえていた。

その日の夕方、軽めのメニューを早々に終わらせて、千五百を計ってみると自己ベストより三秒以上も早いタイムが出た。四分一秒五〇。

「端山、お前休みの間秘密の特訓でもしたの

か？」

川嶋先生に言われて、半日前のことを思い出して一人でニヤけてしまった。

「いや、特に、何も。」

次の日、競技場で八百と千五百を計るとどちらも自己ベストが出た。八百はとうとう二分を切り、千五百も三分三秒台まで縮まっていた。

「あいつの成長ぶりには恐怖を感じるよ。タイムが縮まる度、世界のどっかでもんでもない不幸が起こってるんじゃないかって思うくらいだ」

川嶋先生はそんなことを言っていたらしい。僕だって怖かった。何の前触れもなく、突然地獄に落ちてしまいそうで。気付いたら、僕一人を遺して、世界が滅びてしまいそうで。

「今日千五百三本な。十分ずつおいて、最後の終わったら出来るだけ休憩入れずに十キロジョグな。」

最近専ら千五百しか計っていないような気がする。まあ、この前のレース展開を考えれば八百でのインターハイはないと思っただろうがいいかもしれない。身体に千五百のペース配分がインプットされてしまつて、八百で走り終えるつもりでもいつも速すぎたり遅すぎたりして最後の百メートルがひどいことになる。

「千五百三本目。よいい、はい。」

十分置きで千五百三本は結構しんどい。この後に十キロジョグが待ってると思うと、もう、本当に家に帰ってしまいたくなる。

「三百メートル、四十三、四十四、四十五……」

少し早いかもしれない。ああ、そういえば今日は奇数の日だから僕が風呂掃除の当番だ。多分家に着くのは七時頃だから、きつと仕事から帰ってきた母親が、ご機嫌ナナメで夕飯の支度をしているのだろう。

「六百メートル、一分三十一、三十二、三十三……」

のろのろと転がってきたソフトボールに、何か似顔絵のようなものを書いてあるのが見えた。よける必要もなかったが、前髪を押さえながら走ってきた一年のソフト部員に「すいません」と頭を下げられた。

「九百メートル、二分二十一、二十二、二十三……」

男子ハンドボール部のマネージャーが水飲み場で給水ボトルを洗っている。入学当初から学年一の美人と謳われている、一組の牧野さんだ。

「千二百、三分十、十一、十二……」
たった三ヶ月かそこで五人に告白されたと

かされないとか。噂ではハンド部の誰かに片思い中らしいが、牧野さんに好きだなんていわれたら、僕なら間違いない間髪要れずにイエスだ。

「三分五十六、五十七、五十八、五十九……端山くん、三分五十九秒七四です。」

嘘だろ？そんなに一生懸命走ったわけ？つい昨日やつと四分を切ったばかりだったのに。さつき飲んだいちごオレに何か入っていたのだろうか。そんなんで失格とか、もし本当なら笑えない。

それが、南関東大会の四日前か五日前のことだった。

六月二十七日、午前十時三十五分。周りがスタートの練習を始めた。僕は肩から順に腕、脇、腹、もも、ふくらはぎと全身を軽く叩いていき、二、三度屈伸をした後で大きく伸びをして、それからいつものように三回、大きくジャンプをした。その場で駆け足をして深く息を吸う。肺が膨らみきつたところでスタートの位置に着くよう指示された。息を吐きながら第三レーンまでゆっくり歩いていき、線ギリギリまで出した右足に体重をのせる。一度ぎゅっと握った拳を大きくパーにしてから、今度は半年前中村先生に言われたとおり小指だけに軽く力を入れ、残りの四本の指は卵を持っているような形にし

た。

男子千五百メートル決勝。

「よいい」

みんなの腰が少しだけ低くなる。

パン。ピストルの音。

一斉に飛び出した。いつものことだが、皆百メートル走並みの速さでスタートするもんだから、序盤抑えて走ろうと思っただけでも知らず知らずにスピードを上げてしまふ。どこの学校が分からないけれど、レース前から目立っていたパンチパーマでやたら手足の長い黒人を先頭に、水泳選手と見間違っくらい肩幅の広い茶髪、その後ろを走るくずれかかったモヒカンに笑いそうになりながら、カーブを曲がりきったところで僕は四番手につけていた。

千メートルを過ぎて皆が疲れ始めたところで一気にスピードを上げて抜いていく、僕のやり方はいつも同じだった。二つ目のカーブで後ろの方をチラッと見た。筋肉の塊みたいなやつが一人、もう既に遅れ始めていて、僕の後ろには二、三メートル開けて三人がほぼ間隔をあけずに続いていた。スタート地点を通り過ぎてまた直線に入る。タイムはどうだろう。トップを走る黒人のペースが速いのか、他のメンバーが全体的に抑え気味で走っているのか、それともた

だ単に僕の体内時計が狂っているのか……。タイムが気になる。先輩やマネージャー達が「ファイト」と叫んでいる前を通り過ぎ、幅跳びの選手達の横を走り抜けた。階段状になった客席の上の方では、一組の男女が仲良さうに何かを眺めて笑っている。端には深く被った帽子のつばを両手でつまみながら足を組み替える女の人が見えた。

八百メートルを過ぎた。あと残り半分。スタート地点の近くでは槍投げの選手達が集まって点呼を受けていた。たいていがタオルでフォームの確認やイメージトレーニングを行う。タオルなんかで練習になるのか？というのが僕の本音だけれど。後ろを振り返るとさっきまですぐ後ろを走っていた三人が僕から五メートルほど離れたところを走っていた。少しだけスピードを上げてカーブを曲がりながら、残り五百メートルのどの地点で前の三人を抜かそうか考えていた。さっきの仲良しカップルは相変わらず楽しそうにいちやいちゃしている。その時に初めてゴール地点に立っている川嶋先生に気付いた僕は、右手の人差し指と中指で左手の手首をぼんぼんと叩いた。

タイムは？

先生が右手の親指を立てた。

合に熱くなっている。川嶋先生がタオルと飲み物を持って走ってきた。喘息みたいな呼吸は一向に落ち着かない。関東大会でこれかよ……。

「ヘイ」

黒くて細い二本の脚が目に入った。顔を上げると太陽よりも大きい手が伸びてきた。大量の汗のせいで天然のパンチパーマがおかしなことになっている。彼の右手に身をゆだね、僕は頼りない両脚でゆっくりと立ち上がった。

「アリガトゴザマス」

心の底から走ることを楽しんでいる顔だった。全く、何てやつだ。

「只今の結果をお知らせします。一位、タゼブ君。三分五十七秒八三。二位、端山君。三分五十八秒六〇。三位、内山君。四分二秒〇一……」

「奇跡だな」

川嶋先生が言った。

「実力、つすよ。」

言って舌を噛んだ。

インターハイ。入部当初から川嶋先生に散々言われてきた言葉だったから、インターハイに出るのが物凄く普通というか、何だか当たり前のことのようにも思われた。あまり実感が湧かなかったのかもしれない。上手く行き過ぎて、

もっとスピードを上げる。

カンカンカン。鐘が鳴る。ゴール地点を通り過ぎるまでに前を走るモヒカンやろつに並んだ。完全に元気のなくなったモヒカンを横目で見ながら、カーブを曲がったところで余裕の雰囲気をかもし出しながら前に立った。モヒカンやろつを抜かしたのに、先頭の黒人との距離は一向に縮まっているように感じられなかった。皆のタイムが一番落ちるラスト一周の最初の直線。広すぎる肩幅ときれいな小麦色を眺めながら一気に抜こうと思ったのに、向こうも抜かせまいとスピードを上げる。一度スピードを落とし、そいつがつかられてスピードを落としたところでスパートをかけた。抜かせ！。先輩の叫ぶ声が聞こえる。もちろん。腕をリラックスしてぶらぶら振りながら、スイマーもどきの右腕すれすれを駆け抜けた。カーブに入ってしまったば向こうも無理に抜き返そうとは思わないだろう。残り二百メートル。充分抜かせる距離だ。だけど前を走る細い背中が、今までになく果てしなく遠く感じられた。腕を戻して両膝にぐつと力を入れる。いつも以上にかかると体重がのつてるのが分かるくらい、僕は必死で脚を回転させた。もう呼吸はぼろぼろだった。最後の直線に入って差は二メートルあるかない

思い通りにことが運んで、スリルを楽しむ暇もスランプに悩む間もなく、あつという間だったから。

学校の南門のすぐ横には、『一年三組 端山順平 一五〇メートル 全国高校総体出場』と、大袈裟に大きな横断幕がかけられた。知らないうちに接点のない先輩や関わりのない先生からも名前と顔を覚えられた僕は、廊下で時々全く知らない人から「頑張ってください」と言われることがあり、それから授業中にはやたらと指されるようになった。

インターハイまで一週間を切った。明日からはだいぶ軽くなるからな。川嶋先生にそう言われた僕の今日のメニューは五百メートルダッシュ。千メートルジョグ×五回を三セットと、十五分の休憩を挟んだ後、一キロ五分ペースで一時間のジョグ。炎天下、僕は氷水に浸けたスポンジを顔や胸になすりつけることでどうにか体温が急激に上昇するのを防いでいた。激しく上下する肩から伸びる両腕はもはや重りのようにも感じられ、だらしなくぶらぶらと揺れているだけのそれらは、ともすれば僕の腹に当たって僕の走りを妨害してしまいうつた。一時間のジョギングの後で三十分間を置いて千五百のタイムを一本だけ計ってもらい、

か。覚悟を決めて少しだけ右にずれた僕は、中学三年の時のレースを思い出していた。最後の最後で坊主頭を置き去りにした、あのレースを。だけどいくらスピードを上げても黒人はどんどん進んでいく。まるで背中が羽がついているみたいだ。ハアハアハア。ひどい呼吸だ。待ってくれ。こける。こけちまえ。お前疲れてないのか？頼む。もう走れないだろ？限界だろ？こんなところで負けていられないんだ。頼む。一番に、あの白いテープを切らせてくれ。残りがあと三十メートル位だろうが。突然、信じられないほど身体が軽くなった。いける。抜かせる。勝てる。競技場中に聞こえてしまいうような呼吸に、黒人が首を振って僕を見る。僕は真っすぐに伸びた白いテープだけを見て、リアル鬼ごっこをしているような気持ちで、背後に人食い狼が迫ってきてるような気持ちで、一心不乱に足を前に出す。並んだか。僕の方が半歩後ろか。苦しい。死にそうだ。だめだ。追い越せない。

一位でゴールしたその黒人は、テープを払って少しずつスピードを落としながらクルダウンに入った。何てやつだ。僕はゴールの線を越えた右足に全体重をのせた。何故か左足だけが痙攣していて、僕は歩くことが出来なくてその場に座り込んだ。赤茶色のタータンが、いい具

自己ベストに百分の六秒足りない三分五十四秒三〇の記録を見て川嶋先生はこう言った。

「こりや表彰台も夢じゃないかもな」

実際僕はどこまでやれるか検討もつかなく、だけど来年再来年があると云ってもやっぱり出来ることなら結果を残したいと思っていた。

僕は鬼のようなメニューをこなした後、いつものように同じクラスでサッカー部の杉山陽の自転車の後ろに乗っけてもらい駅まで向かった。

「君達、二人乗り駄目ですよ。降りなさい。」僕達の高校の回りは大きい道路が多いせい、か、やたら巡回中のパトカーと遭遇する率が高い。だけどそれもやっぱりいつものことで、僕は声を揃えて「はい」と答え、その十秒後にはまた陽の後ろに跨るのだ。

駅前の大きな交差点に差し掛かった時、前方の信号は青だった。車道を走っていた時速五十キロくらいの原付きが左から来て、陽の目の前でほぼスピードを落とさないうまま右に曲がった。年季の入った陽の黒いママチャリは、下り坂で出すぎたスピードを一気に落とせないうほどブレーキが緩んでいて、後ろに六十キロの荷物を乗せていた陽はその原付きをよけ切れなかつ

たんだ。陽はブレーキをかけながら思いつきりハンドルを右に切り、僕は揃って右足を地面につけた。同時にロケット花火みたいな勢いで突っ込んできたその原付きの前輪は、真っ直ぐ僕の左足を射止めた。自転車のタイヤの真ん中

にあった六角形の小さなねじが、まるで何かのマイクロチップみたいに僕のふくらはぎに埋め込まれていくのが分かった。左足の膝から下が、変な方向に曲がった気がした。僕は自転車ごと飛ばされ、その瞬間「死んだな」と思った僕は痛みさえも感じていなかった。その後のことは分からない。

ああ。もしかしたら僕は、そう、自分を誰かに認めてほしかったのかもしれない。誰とでもすぐ友達になれたし、勉強もスポーツもやればなんだって出来た。女の子にも全くもてないわけではなかったし、家族と仲が悪いわけでもなかった。それなのに僕は時々急に孤独感に襲われることがあって、たまらないくらい、そうまるで、世界中に僕一人だけ取り残されてしまったかと思うくらい、寂しくなることがあった。そういう時に時間を気にせず電話をしたりできる友達が僕にはいなくて、だから僕は多分、本

当の自分みたいなものを誰かに気付いて欲しくて、ただどやっぱり捨て身にはなれなくて、それでああやって走ることだけに夢中になっていたのだと。

目が覚めると僕は病院のベッドに横たわっていた。テレビのアナウンサーが今日で八月も終わりですが、と言った。窓の向こうでは木の葉が騒がしく歌を歌い、蝉は悲しげに鳴き声を響かせている。

ゆっくりと、本当にゆっくりと身体を起こした僕はおそるおそる左手で拳を作ってみた。左手の五本の指は、掌につく前に変な形をしたまま止まった。筋肉の緩んだ手でタオルケットをはぎ、立とうとしたところであることに気付いた。僕の左足は、膝から下がなくなっていた。そして、身体の一部がなくなっているというのに少しも違和感がない。あるはずの足首に向かって、そこにあった飴玉を投げてみた。小さい頃よく舐めていたいちごミルクの包み紙は、少しだけ転がって布の下隠れていった。

僕は静かにベッドに倒れ込み、そのまま目を閉じた。

目尻から頬を伝った涙が、こめかみを掠り、

耳の穴の中へ入っていった。

右目の視界だけが、何だかぼやけていた。そのぼやけた右目には、あの藍色のノートがゆれていた。

藍色の表紙をめくれば、鉛色をした小学生みたいに下手くそな字が右斜め上に少しずつ掠れているはずだ。だけどそこに並んだいくつもの同じような数列を、僕は今、心の底から見たくないと思う。

神様、教えてくれ。

僕はこれからどうすればいい？

自ら命を絶つ権利なんて無いかもしれない。だけどそれなら、こんな身体で生き続ける義務だってないだろう？